一三、世間の同情を蒐めた最初の大事故

大正十年陽春の四月一日午後四時二十分頃、熱海口の坑口から約千呎奥に入つた處が、一大音響と共に約二チヤイン位(百三十呎)崩壞しました。丹那トンネルとしてはこれが最初の大事故であります。其の時の記錄は當時の新聞雜誌に種々の記事と共に出まして、世間的にはその時の様子が割合に明かになつて居ります。其の時は底設導坑の掘鑿は四千四百十六呎近くまで掘り進められて居り、頂設導坑は千六百五十呎許り進んで居りました。そして崩壞した處は、トンネルの大きさに掘り擴げられてコンクリート卷きにかゝつてゐた處でありました。ですからこの崩壞の爲に、坑奥と坑口とが中斷されて、奥で仕事をしてゐた十七人は退路を遮斷され、逃げ路を失つて、生ながら閉塞されました。崩壞の個所で仕事をして居りました十六名が生埋めになりました。この生埋めになつた人柱の十六人は疊築の仕事をしてゐた人々で、疊築工事を一手に下請して居ました、川瀨飯場の配下です。崩壞と同時に中の様子を見ようと思つて恐る〳〵カンテラで手さぐりに近づいてみますと、ドツトと物凄い音がして、其度に疾風が起り、持つてゐるカンテラの灯が消えて仕舞ふのは口に云はれぬ怖ろしさでした。

何等の豫感もなく、ほんとに、突然の大事故なのです。呪はれた日だつたのです。事故そのものを書くには少しも躊躇する事はないのですが、事故の犠牲となつた人々の事を書く事は、何としても筆が運びません。けれど、ここに書いて事情を後世に殘す事は今後此の道を歩む人々の警鐘ともなる事でせう。さうすれば丹那の人柱となつた

人々の靈も慰められるのではないでせうか。吾々としてはどうしてもこの人々の死が無意味でない樣にしたいと思ひます。

閉塞された人々の中に會社の飯田清太氏が居りましたが、少しもあわてる事なく他の人々を指揮し、其の處置は甚だ當を得て居りました。又十六人の人々も一致共力してあわてずに、夫れ〴〵方法を講じ、體力の消耗をお互に防ぎ、遂に八日目で救助隊の手に救ひ出されました。閉塞された一同が一ケ所に集つて居りますと水がだん〳〵溜つて來るので、皆、中脊盤に上り、飯田氏は水が其處まで上つてくるのに幾日かゝるかまで計算したと云ふ事です。同氏はすべてをこの調子で落着いて萬事を考へ一同を指導しました。

大崩壞

大崩壞の直前、坑內を見廻つて樣子を好く知つてゐたのは煉瓦卷き下請の川瀨龜藏氏です。しかも大崩壞と共に逝くなつた十六人の大部分は、同氏が自分の子供の樣に大事にして養つてゐた配下の連中です。何と云ふ天の惡戲でせう。同氏の話をきゝませう。

『崩壞の場所より少し手前は大分地質も惡いので可成り心配して愼重に仕事をしました。そして無事に此處を切り拔けたのでホツト一安心して奧の仕事に移りました。其處は手前よりは地質もよく、これなら普通に進行出來ると安心しました。當時使用した支保工はお役所から支給されたもので、實に立派なものでした。地質はよし、支保工は立派だし、これが落ちるとはどうしても考へられませんでした。

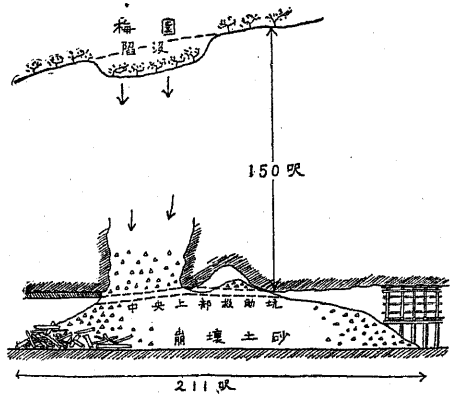
當日私は二時に坑奧に入らうとして、坑內のいつも電車の來る處で電車を待ち乍ら、見るともなしに、奧を見ると丁度一時間前にセントルの檢査をして貰つた筈なのに、セントルの工合が變だ、これで如何して、お役人の檢査が通つたのかと不思議に思ひました。と云ふのはセントルが皆一二寸喰ひ違つて居る。跳出しから砂がパラパラと落ちてゐる。けれど私の頭にはこんな立派な支保工が組んであるのだから、潰れる氣遣ひはないと信じてゐたのです。しかし砂のパラパラ落ちるのはおかしい。普通なら何か異狀があるに違ひないと、直ぐに氣付く筈なのに魔がさしたとでも云ふのでせうか、この時は大引が非常に押されてゐると云ふ事にちつとも氣が付かなかつたのです。若し之れにさへ氣が付けば十六人を殺さずにすんだのです。ですから云ひかへれば私が十六人を殺した樣なものです。その十六人の中十三人迄は皆私の部屋の者です。私は其の時から今日まで、いや丹那トンネルのある限り十六人を祭ります。

實際崩れた後を見ると、支保工の足が盡く綺麗にさらはれてペシヤペシヤと牛蒡拔きにさらはれてゐました。そして材料がみな束になつてトンネルと並行に倒れて居ました。何しろ腰をおろして監督してゐた者がその儘に埋つてゐた位、崩れるのは早かつたのです。それは坑口の方が惡くて奧は良かつたが、坑口の方の惡い處に誘はれて奧の良い處がさきに落ちたからでせう。兎に角、私が大引の押されて居るのに氣が付かなかつたのが返す返す殘念です。』

大崩壞から一ケ月餘りもたつた、五月七日に熱海地方に大雨がありましたが、そのあとで、崩壞個所の直上にあた

る梅園の一區劃に廣さ約一坪半深さ約三呎の凹みが出來ました。これは崩壊してゆるんだ所がだん〳〵しまつて行つるたからでせう、梅園に行つて、其の凹みを見る毎に當時の慘劇が思ひ出されます。

救助手段



崩壊の際土砂に埋れて命のない者もあるが、大部分の者は崩壊個所より奥で仕事をして居たのだから、閉塞されて救援の手を待つてゐるに違ひない。一刻も早く内外の連絡をとらなければいけない。其の爲めに、四吋送風鐵管を叩き、或は鐵管に口を當てゝ坑奥の生存者と通信を試みましたが――此の事に就きましては、當時のトンネルの權威者田邊博士から親切な注意の電報も來ました――此の鐵管は途中ゴムホースで接續した所があり、之が押し潰されて居た爲めか、何等の反響もありませんでした。後で分つたのですが、坑内に閉塞された人々も何度もこの鐵管信號を試みたのですが駄目でした。愈〻救助坑を掘る事になりましたが、其の位置方法に就ていろ〳〵意見が出ました。一説は崩れた土砂は山型になつてゐるものだから、頂設盤で掘進するのが一番近いから、其の方法を執つた方がよい、と謂ふのです。他の説は、上は肌落ちがあるから反つて危險である。下から掘つた方が救助隊自身が安全に仕事が出來る。さもないと、救助隊の救助隊が必要になるかも知れないと云ふのです。で結局底設盤と兩側との三ケ所を掘る事にしました。實際大きな肌落は二三回その後も有つた樣です。翌朝三島口の鹿島組が救援に來て呉れたので、請負者側が主張した、頂設盤からの救助作業にも着手する事にしました。坑奥に閉塞され一日千秋の思ひで救ひを待つた連中もさる事乍ら、外に在つて、不眠不休、精も根も費ひ盡くして、危險な救助作業に從事した者の骨折りも、涙ぐましいものがありました。終には、一寸仕事を休んで腰を卸すと、其儘寢込んで仕舞ふ有樣でした。結局上から進んだ鹿島組の方が先きに坑奥に達する事が出來、遭難者は此の手に依つて救助されました。

尊き殉難者

坑奥に閉塞された人々が生きて救ひの手を待つでゐると云ふ事がわかつてゐる一方、崩壞現場に居合せて埋沒された者の中にも、或は生存してゐる者が、あるかも知れないので、此の方の救助の手もゆるめる事は出來ません。しかも下を掘ると、大きな材料が非常に錯雜して落ち重つてゐるので、救助坑は仲々はかどりませんでした。それでも十一日目から一人捜し二人捜しゝました。皆、最早生存してゐる人は一人もなく、何れも、丹那トンネルの尊い人柱となりました。

F君は崩壞と同時に埋沒されたのですが、しばらく埋れたまゝに生存して居たのです。救助坑が進むと中で人聲がする。そこで坑奥の聲のする方に掘りすゝめて行くうちに、軈て、聲がなくなりました。漸くF君に近づいて其樣子をみますと、丁度、材料の空隙に身を潜めて居り、足は土砂に押へられて、事切れて居りました。この樣子か

らみると上半身から頭は自由になるので、兩腕で落ちて來る材木を差し上げる樣に、支へ乍ら、救ひを求めてゐた處、救助坑の掘進で山がゆるみ、材料が段々に强く押し下つて來て、支へる手は次第に下つてぢりぢりと空隙を縮められ、遂には頭、頸、胸と順次に押され、漸く努力した救助隊が到達した時には遂にペチャンコになつて壓しつぶされて居つたのであります。

A君を發掘した時の話です。救助隊の一人が掘り進んでゆくと、もうこの時は崩壞後十一日目ですから死體は腐敗して異臭が鼻をつきます。見ると桃色の綺麗な太もゝが出てゐます。埋沒者の中に女人夫が居る筈ですから、それはきつとそのWさんの死體であらうと、外部にWさんの死體發見と報告し、外部では直に役場の方の手續も致しまして、いよ／＼發掘してみますと男の死體でした。即ちA君の死體なので驚きました。桃色の太もゝ、それは悲慘にもその部分の上皮がむけてゐたのです。

B君を發掘したのは實に三十七日目でした。彼は丁度コンクリートの仕事をしてゐた處に居合せた爲めに片足を打たてのコンクリートの中に入れたまゝ埋沒され、發掘した時には片足がコンクリートと共に凝結して、これを拔きとるのには、コンクリートを破壞しなければならない、しかし發破をかけるわけにゆかないので苦心しました。

K女を發掘した時の話です。坑內は大分水に浸つてゐます。その水溜りに女の髪がゆら／＼と浮いて居ります。それに氣のついた救助隊の一人が髪をつかむとドロドロと頭の皮ごとむけてしまひました。

何にしろ、死體の發掘を終つたのは、六月の初です。實に二ケ月半に亘る死體搜査には從業員一同へトへトになりました。しかも陽春の候でありました爲めに、人體の腐敗する事が早くて異臭鼻をつくと謂ふ樣な生やさしいものではありませんでした。とても生きた心地がしませんでした。死體の異臭を一時でも消すために、山椒油、片腦油、樟腦水其他いろいろのものを撒いてみました。けれど、何れも失敗、矢張り線香を焚くのが一番よい樣でした。最初富田所長が高價なフランス製の香水を撒いた事もあります。

一度死體搜査に出ると死體の臭ひが身體につきます。それは發見した死體の搬出をする救助坑が土壓の爲めだんだん狹くなり、取り出す死體が一寸でも土や支保工にさわると、すぐに肉片がくつ付く。スコツプやツルのさきに肉片が付くと、一寸そこらの土や支保工材で拭う、其處に監督の者が行つて「どうだ」と言ひ乍ら支保工にさわると、手にベツトリと肉片が付くと云ふ風ですから堪りません。死體は發見されると俵につゝんで運び出す樣にしました。そして遺族の者や關係者の爲めに坑口の近くに祭壇を常設してこゝで燒香をさせ、野邊の送りをしました。處が火葬にするとちつとも燒けない。つまり死體の油がなくなつてゐるので、薪ばかり燃えて、死體がやけないのです。人間は死んでも油のきれたのは困ります。

胸に逼る思ひ

救助隊の人々は其の當時、烏賊の丸煮、鯖の煮付、それと味噌汁などは食べられませんでした。何故烏賊の丸煮や何かが喰べられなかつたかと云ふと、これも悲慘な話ですが、埋沒壓死者のH君は、支保工材に頭の頂點を垂直に押され、爲に頭も顏もみな兩肩の中に嵌め込まれて仕舞つて、丁度烏賊の丸煮の樣な工合になつてゐたのです。

ですから烏賊の丸煮を見ると、當時の様子をまざまざと眼の前にさらけ出される、と云ふので堪らないのです。鯖の煮付も皮がよくむけるので、それを見ては喰べる處か、思はず顔をそむける事になるのです。全く死體の皮は一寸でもふれると、ズルズルとむけるので猛者揃のトンネル坑夫も、これを見てはかなひません。味噌汁は當時の坑内の水は人間の油と、死體捜査のためににごる赤味の土との爲めに、丁度味噌汁の様になつて、ゆるく流れ、或はよどむと謂ふわけで、これ亦その様を再び見る思ひで、味噌汁に箸をとる勇氣は出ないのです。當時いかに油が流れたかは、死體全部を收容し、しかも土砂を取片付けた後も、其附近は異臭を發し、數年の間入梅時になると二三寸位のカビが生えたものです。

崩壞當時の坑外

坑内は死にもの狂ひで生存者の救出、死體發掘と、第一線に立つて働いて居る一方、坑外ではまるで戰場の様な騒ぎで善後處置をして居りました。その景氣はすばらしいもので、鐵道病院の大旗の下に大テントが張られ、醫者や、看護婦が大勢つめかける、地元の人々が消防隊や在鄕軍人の旗押し立てゝ應援に來る、と謂ふわけで、しかもそれが一日や二日ではなく數十日に及んだのですからたいしたものです。一番困つたのは遭難者の家族が坑口に集つて親や夫や我子の安否を氣遣ひ乍ら、種々の申出をされる事で、中には生存者として確に救助されたと云ふので一眼で好いから夫に合せて下さい、と云ふ、それでは、徒らに救助された者を興奮させる丈でありますから「醫者と話をさせるから、天幕の外で聞いてゐて下さい」と云ひ、醫者や看護婦に頼み、閉塞されて救助された誰れ彼れと一言二言話をして貰ひました。又或る人は丁度舊の雛祭の時なので、若し助かつたらこの菱餅を喰べさせたいと一週間も經つてヒビ割れの餅を態々持つて來た人もありました。

ある雨のふる夜に、坑外に設けられた祭壇に火の玉が見えます。丁度仕事を終つて坑内の見張から出て來ると、確かに見える。見えるかと思ふと消える。坑内にはまだ幾多の犧牲者が埋れてゐる。連日の過勞で坑内外は比較的靜かだ。其の上に雨、火の玉、なんとしても近付いて確める勇氣は出ません。それが誰れが見ても消えては又見えるのですから、いよいよ不思議と云ふので、屈强の者三人ばかり、木刀を持つて、恐る恐る近づいて見ました。そして始め祭壇の邊に見えたものが近づけば近づくだけ、向ふに逃げてゆく様に遠ざかる。仕方がないから長追ひせずに一度歸つて見ると又もとの處に見える。すると一人が何だかどこかで人の呼ぶ聲がすると云ひ出す、いよいよ一同恐れをなしましたが、こんな事が世間にばつと擴がると又面倒だと云ふので、更に勇氣を出して落着いて行つてみますと、祭壇の電燈に雫する雨だれが光線の工合で大きな火の玉に見えるのでした。今考へて見ると、とんだナンセンスです。

救命石の由來

春、梅園に花薫る頃、其處に杖を曳く人が坑門上の右側にある、山神社の境内に救命石と名付けた大石を見るでせう。山神社と謂ふのは、トンネルの工事を起す際に必ず祀る山の神様です。この救命石には次の様な由來話があります。丁度この大崩壞の數分前です、礪出の者達が頂設盤の礪を漏斗（ジョウゴ）にあけ、下でトロに受けて居りますと、この

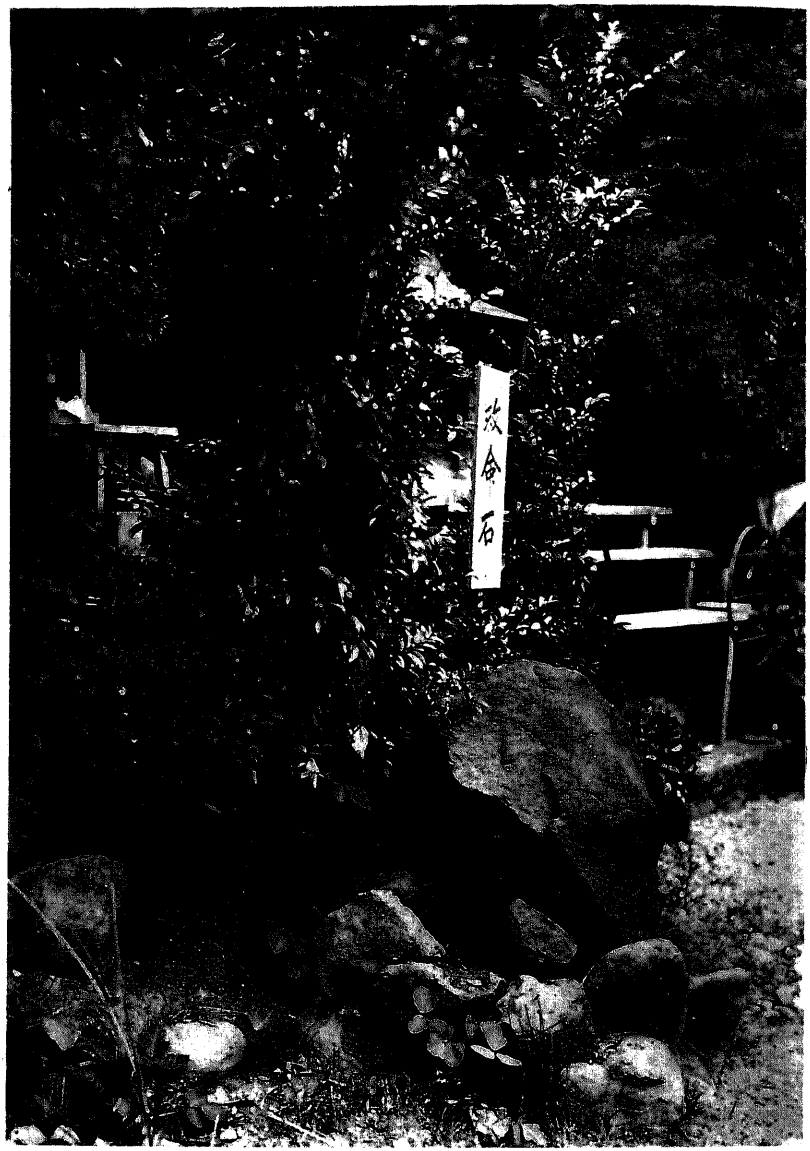
大石が漏斗（ジョウゴ）にひつかゝつた、さあ大變、何とかして、これを取り出さなければいかんと云ふので、ほかのトロと共に坑外に出る筈の人夫一同が手傳つて、大石の取り除けに從事しました。そのうちに大崩壞がやつて來て一同坑奥に閉ぢ込められたのです。若しこの大石が漏斗（ジョウゴ）に引つかゝらず、仕事が順調に進んで居たものとすれば、丁度この石にかゝつて居た多數の人夫はトロと共に崩壞の個所を通つてゐる時分で、當然埋沒される事になつた筈です。この石の爲めに、一同の命が助かつたと云ふわけで、救命石と命名して坑門の上の山神社の所に保存してあるのです。

遺族で今日迄勤續してゐる親子

トンネルを卷くのに使ふコンクリート塊の製作場に岩淵みせ、同義雄の母子が今働いて居ります。此の人達はこの大崩壞の際、殉職された岩淵惣助君の妻子です。當時夫を失つた、三十九歳のみせさんは、十七歳になる一人つ子の義雄君を連れて木の香も新しい夫の位牌を抱き、涙ながらに鄉里岩手縣に歸り、懇に弔を濟ませました。其後再び氣を取り直して丹那トンネルに戻り、前に夫の親方であつた川瀨部屋の厄介になりました。十有年後の今日に至る迄、朋輩の氣受もよく一生懸命に働き毎日丁場に元氣な顏を見せて居ります。母子は思ひ出深い丹那トンネルに働き乍ら、毎日夫の冥福を祈つて居ります。

一同を感激させた手紙

昭和八年六月十九日、流石の丹那トンネルも遂に征服されました。數多く來た祝の便りの中に、次の樣なのがあります。



救命石とトンネルの守護神(熱海口梅園道の上にある)

（原文のまゝ）

御手紙にて失禮ですが、熱海線丹那トンネルの貫通に付き御祝申上げます。私は大正十年四月一日に犧牲者の内の當時工夫長細川治平の二男細川平吉です。唯今ブリキ職を致し毎日御蔭様にて一生懸命にて働いて居ります。其後丹那トンネルが一日も早く完成を心待ちに致し居りました處、本日新聞にて十九日に開通との報を拜見致し私非常に喜び居ります。又地下に寢る父もどんなに喜んで居る事でせう。今年はなき父の十三年忌です。御盆には郷里山形へ行き其の喜びを報告致して參ります。失禮を顧ず書面に御祝申上げます。

皆々様の御健康を心から御祈居ります。

細川平吉

平山建設課長様

閉塞者飯田清太氏日誌の一節

左記の日誌斷片は飯田氏が閉塞され乍ら書き綴つたものです。

四月一日

不取敢人員點呼ヲナス

飯田清太、小椋熊藏、駒場周七、谷口榮平、栗田一由、門谷盛一、安田喜作、萩野太作、西村伊三郎、勝股七平、武田周治、池田遊治、遠田十一郎、遠田加三治、伊藤忠太郎、齋藤末藏、伊藤三之助　計　拾七名

萬一ヲ慮リ切端迄調ニ行ク

午後四時半頃異狀音ト共ニ消燈シ間モナク日光見エズ暗黑界トナル

午後四時四十分一同六十鎖ニ集合

午後六時六十五鎖ノ切上リ個所ニ於テ送風管ノフランジヲ切斷シ專ラ排水ニ努ム

午後六時十分崩壞區間ノ調査ヲナス

五十七鎖五十節ヨリ坑口ニ向テ大立二本ニ異狀アルヲ認メ崩壞區間ハ約一鎖半ト推定ス

氣溫ノ關係上六十五鎖五十節ニ轉ズ、

七時三十分底設切端迄板ヲ集メニ行キ板ニテ床ヲ張リ身體ノ保溫ニ努ム

六時、六時半、七時、七時半、鐵管ヲ亂打シ音響信號ヲナセドモ應答ナシ

午後八時半水量ヲ概算シ頂設迄浸水スルニハ全ク坑外ニ出水ナキモノト見テ少ナクモ六日間ヲ要ス依テ水攻メノ慮全クナシ只送風管ヲ利用シ通話ノ方法アル事ヲ之レ祈ルト一般ニ云ヒ聞カセ一同ノ安堵ニ努ム、幾分安堵セシヤ否疲勞ノ爲メ各自睡眠狀態ニ入ル時ニ九時

午後十一時鐵管ニ音響信號ヲシテ應答ナシ

四月二日

午前二時　鐵管音響信號

午前四時　音響信號

九時半　同　上

十二時　同　上

午後二時半　同　上

三時　空腹ニ堪ヘズ遂ニ一筋ノ「ワラ」ヲタヨリニカヂリダス

衰退ノ狀アリ身體フラフラシ出ス

午後十時　最後ノ音響信號三十分間亂打セシモ應答ナシ

午前五時　鐵管信號返事ナシ

四月三日

午前五時頃　崩壞現場ニ近ヅキ進行如何ヲ確ム

午前十時頃　再ビ確ム矢木打ノ音カスカニ聞ユル樣ダ

脈搏一〇八

午後四時半　空氣稀薄トナリマツチ付カズ依テ六十鎖中背大引上ニ陣ヲ變エル下ハ最モヨケレド湧水ノ直下ニテ居ラレズ水ノ增サヾルハ天佑トス

決死ヲ以テ二名乃至三名宛調査ニ行キ五十七鎖三十節ヨリ八間程坑口ノ方ヘ行ク事ガ出來タ

四月四日

午前一時　勝股腹痛看護ニ務ム

下水ノ水ニ舌鼓ヲナラス水ガウマイウマイ最早ワラカム元氣モナシタレカレトナクウワゴト多ク然シ小生中々元氣

午前二時　折シモカスカニ矢ヲ打音洩ル元氣増ス

谷口ヲシテ確メシム愈ゝ進行模様確實トナル夫レ迄四十尺此分ニテハ五日中ニ貫通スルナラン

駒場目マイ小椋臥タキリ

午前七時　大谷ハヨク命ヲ重ンジ再々信號ニ行キ一般ノ元氣ヲ増ス大ニ感謝ス務メテ一般ノ元氣ニアラン事ヲ心ガケ我ヨリ元氣充滿シ慰撫ニ務ム

愈ゝ下水ノ上ヲ進行シ來ルモノト認ム

上部來ラバ三日晩中ニ出ラレシモノヲ信號ノ出來ザルハ實ニ遺憾ナリ最モ遺憾トスルハ送風管ニ依リ食物ノ運搬ナキ事ナリ老年技術者ノ澤山有ランニ返ス返スモ遺憾ニ思フ後日ノ爲メ特ニ此點ニ注意アラン事ヲ

次第ニ空氣モ稀薄トナリマツチ中々付カズ

空氣稀薄トナリ三度轉居スルノ餘儀ナキニ至ルウエンチ下、下水上ニ床ヲ張リ十七名横臥ス大部分ハ「フラフラ」シテ「カロージ」テ上ヨリ下ロス水ハ少シモ増サズ天佑天佑

午後一時　最後ノ通水試驗ヲ送風管ニ依リ施ス經過ヲ見ルニ中々良ク水ヲ呑ム所ヲ見レバ愈ゝ口迄通ジ居ルモノト斷定シ萬一僥倖ヲ得バ送風管ニ依リ幾分ノ空氣ト食物ヲ得ン事ヲ唯一ノ樂ミニ應答ヲマツ

意氣銷沈セシ爲メ追分ケヲ高唱シテ元氣ヲ鼓吹ス

ヨク今迄燈火有リシモ此後數分ノ運命愈ゝ暗黑界也

午後一時ヨリ二時迄ニ下水一寸減水セリ依テ送風管慥カニ通水出來シモノト認ム

矢打ノ音響次第ニ近ヅキ元氣増ス

午後六時ヨリ五日午後六時迄ガスキエテ暗黑

四月五日

午後六時　偶然ガス一個發見暫時光明ヲ認ム一同貫通セシ如キ元氣ヲ出ス

午後二時　天上ヨリ崩壞止マズ暗々ノ間ニ異音崩落何トモ云ハレヌ淋サヲ感ジ誰云フトナク神佛ニ祈願ヲ始ム

四月六日

午前五時半　愈ゝ最後ノ點火

マツチモナシガスモナシ此後ハ只天ニマカスノミ

愈〻貫通ノ際ノ依頼事項

坑内ニテ安全地帯ニ一度横臥セシメ第一葡萄酒ヲ薄クシテ飲マサレタシ

必ズ少量ノヲモユヲ飲マシテ數時間安臥セシムル事愈〻内外ノ氣溫ニ馴レタラ病院ニ收容シ療養サレタシ第一ニ食物養生最モ肝要ト思フ此點ニ就キ最モ注意頼ム

右心付候儘宜敷御注意願上候

四月四日午後二時

三　好　君

係　醫　師　殿

閉塞者門屋盛一氏の遺言狀

左記の遺言狀は遭難者の門屋盛一氏が、とても助かる見込無しとして、したためたものであります。

一、身ハ坑夫號令トシテ此ノ變死ニ遇フモ責任上一點ノ苦シミヲ感ゼズ靜カニ死ニ就クナリ

一、親分始メ鄉里ノ親並ニ兄弟ヲ思フ心ハ筆ニツキズ

一、生レテ二十六年何ヲナスコトナクシテ數千圓ノ負債ヲ負ヒテ此ノマヽ死スルコトヲウラム

一、不幸中ノ幸忠夫、貞一ノ出坑セシハ天ノ未ダ捨テザルトコロ兩人ハ歸國シテ父ノ業ヲ次グベシ

一、マツヨハ同棲以來ヨクコノ不甲斐ナキ男ニツクシクレタリ今ハノキワニ一言感謝ス姙娠中ノ兒ヲ分娩セバ切畑ノ父母ニ托シ置キ未ダ若キ身柄故遠慮ナク再緣セヨ

一、予ハ責任上喜ンデ死ノ途ニ入ル

救助された人々の話

左記は崩壞後請負人側で、其の始末を書きまとめた、「熱海線丹那山隧道一部崩壞記事」と題する册子から二三救助者の話を拔抄したものです。

伊藤三之助（二十三歲）人夫

六十六鎖ノ碾刎中突然疾風起リ引返ス全ク地震カト想ヘリ續イテ作業中坑夫來リ山崩レナリト告グ然シ明朝ハ出坑セラルベシト想ヒ居タルガ次ノ日モ全ク何ノ手頼リナク斯クテハ到底助カル見込ナシト思ヘリ、自分ハ新シキ草鞋ヲ所持シ居タルガ之ヲ二日目ニ喰ヒタレドトテモ嚥下出來ズ坑夫ガ勸ムル故無理ニ食ス又ショベルニテ水ヲ受ケ飲ム、救助ノ火ヲ眺メタル時ハ實ニ筆紙ニ盡シ難キ嬉シサヲ感ジ親ノ命ニ背キ此ノ如キ所ニ來タソノ罪ニヨリ死ヌノダ今後ハ親ノ命ニ服セザル可カラズト思ヒタリ、草鞋ノ盡キタル後ハ水ノミヲ飲ミ命ヲ繋グ小便ノ通ズルコト激シク一時間二回位ナリキ

駒場　周七（四十二歲）進鑿坑夫

十七哩六十鎖中背ニ於テ岩石ノ小割ニ從事中突然耳モ聾セン許リノ音響ト共ニアセチリンランプ消失セリ五十

鎖五十節附近ニ於テ桁左側ヨリ崩壞セルモノト思ハル同時ニ坑外ノ光線ヲ眺ムルコトヲ得ザルニ至レリ三日目ニ現場ニ至リ見タルニ尙ホ天井ヨリ礪ノ落下シ來ルニ助カルベシト思ヒツヽモ容易ナラズト直感シタリシガ格別心配セザリキ(生駒隧道ニテ三日間埋沒ノ經驗アリ)崩壞後十五分間礪ノ落下スル音響ヲ聞キ自分ハ約二鎖位ナラント想像セリ、崩壞ノ際發生セル疾風ハ非常ニ强力ニシテ足元ヲ危クセル程ナリキ後生駒當時ノコトヲ想ヒ出シ落付キウトウトト眠リタリ、十日モ經ナバ救助セラルルナラント信ジ書置ノ必要モ想ハズ他ノ者ニ元氣ヲ付ケ居タリ救助ノ火ヲ見タトキハ別ニ何等ノ感想モナカリキ、尤モ最終ノ二日ハ甚ダ氣力衰ヘ小椋號令ハ最モ元氣ヲ失ヒタリト思ハレタリ、生駒隧道ノ例ニ依レバ若シ煉瓦卷ガ五十節モ崩壞セシモノナラバ掘鑿容易ナラザルベシト夫レノミ氣遣ハレタリ、救護所ノ蒲團ノ上ニ收容セラルヽヤ失神約五分間位前後不覺トナリ左方注射ヲ知ラズ右方注射ニテ氣付ケリ經驗アル自分ガ何故ニ今次第一ニ出坑セリヤト云フニ生駒當時ノ經驗ニヨリ救助坑ガ再ビ閉塞シ坑中ニ殘留セラレタル事實ヲ知レルガ爲メニシテ無意識ニ第一ニ飛ビ出セリ。